

# スイッチを入れよう

銀行を換えれば、戦争が終わる。

銀行や郵貯に預金しているお金が、戦争に使われているって知っていましたか？ 金融機関は預かったおかねで短期国債などを購入。国債を発行する政府はアメリカ国債を買う→アメリカ政府は戦争のための軍事費用につかたり、直接軍需企業の株を買い支えたりし

ているんです。そんなのは嫌だという人は、

口座を解約して、環境問題や社会問題に取り組むステキな会社の株を買って企業を応援したり、ろうきんや非営利バンク（NPOバンク）などのエコな金融機関を選びましょう。「NO WAR」と叫ぶよりも、銀行からお金をおろすことが、戦争を止める方法になります。銀行員の皆さんは、自分の会社のお金の使い方をよく、議論して下さい。銀行が変われば世界も変わる。

(有)西川経営オフィスサービス

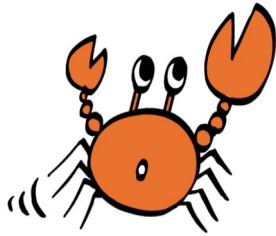
中村会計

## 事務所便り

2010年8月5日 (木) NO 133

地域から明るい未来を作ろう

人間には不思議な習性があって、他人から「やりなさい」と言われてする事は、あまり気が進まない。やっても楽しくない。だが、自分から「やろう」と思ってから「やろう」と同じことでも意気込みが違ってきて楽しくなる。会社にながら「雇われな生き方」個人事業家（フリーランス）がこれからの時代。



「サラリーマンは雇われる身」という会社観の既成概念を一刻も早く変えることです。吉本隆明「銭湯の百話」から

家風呂は安値で便利だが、ときどき近所の銭湯に出かけると、温もりの深さというか厚みというか、それがまるで違う。

温もりの深さや厚みは湯の量が多いほど増してくる。理由は身体にかかる圧力が増すほど厚みや深さが増すからだと思う。わたしは家風呂と銭湯や旅先の温泉とは、まるで次元のちがうものだと思う。何とも言えず自分の好みに合う銭湯とそうでない銭湯があって、だんだん行くところが決まってくる。これは大小とはあまり関係がなく、脱衣場や

湯船や洗い場の調和、明かりの加減、客の感じ、小庭や池の造りなど様々な要素で違うのだとおもうけれど、他の客との心理の距離感が加減できるだけ合致していれば良いということだと思ふ。

裸であって、湯水があり、隣で身体を流している客が、まるで知らない人と思ふこともできるし、近所で道路上行き交わしている人と思ふこむこともできる。

この自由さの感じは水があつて着衣が違つていないという条件がないと得られない感じがする。

江戸時代には銭湯には湯女がいて、お風呂屋の三階などで酒の相手をしてくれたりといったことがあるらしい。たぶん湯女の代わりなどとしてくれたのだろう。いまは法律的に禁止されている。湯女の代わりに自動販売機なら具え

8月13~16日(月)  
迷惑をおかけします。  
事務所、お盆休みです。

女も男も尻になるまで

「小銭入れを持っている男はだめよ」

「お金持ちというのは、どれだけお金を持っているかとかは、関係がないの。どれだけ使ったかで決まるのよ」

とシャネルは名言を残しています。

この田舎では想定すら難しい？見えてこない。

「遊べるうちに遊ばな損」？

事務所の初代創業者は、粋な遊びに徹していました。いまでも、昨日のように懐かしく思い出します。

遊べない人に、いい「仕事」は出来ません。